

契約は続く：パレスチナ人の故郷に対する神聖な権利

神とイスラエルの子らとの契約（ブリット）、正義、義、生命の神聖さに基づく神聖な協定は、アブラハムの伝統の礎である。申命記7:6に記されるように、神はイスラエル人を「聖なる民」として選び、これらの価値を体現し、「諸国民の光となる」（イザヤ42:6）神聖な使命を課した。この契約は精神的なものだけでなく、カナンの地と本質的に結びついており、創世記17:8でアブラハムの裔に約束された：「わたしはあなたとその後のあなたの裔に、あなたが寄留する地、すべてのカナンの地を永遠の所有として与える。」タルムード（ババ・バトラ100a）は土地の神聖さを強調し、その住民を契約の義務に結びつける。しかし、歴史はこの絆を試し、今日、誰がこの契約の真の継承者かという問い合わせを投げかける。

パレスチナ人は、古代イスラエル人の遺伝的・歴史的子孫として、契約の持続的な担い手である。彼らのキリスト教やイスラム教への改宗は、アブラハム伝統内の連續性を反映し、祖先の絆、継続的な存在、搖るぎない忍耐（スムード）は神の戒めと一致し、彼らの故郷に対する神聖な権利を肯定する。彼らのイスラム的な創造の管理は、オリーブや在来樹種の栽培を通じて生物多様性を保ち、非在来の松の植林による生態学的ナクバと対照をなす。これはイスラエル史上最も壊滅的な山火事を引き起こし、神の不承認を示す。神の許可を主張し、暴力や生態系破壊を行う者は、神の名を汚し（チルル・ハシェム）、神の報復を招く（申命記32:25、レビ記18:29）。

パレスチナ人：契約の元来の担い手の後裔

イスラエルの子ら、ヤコブの子孫（創世記32:28）は、アブラハムと結ばれ（創世記17:7）、シナイで再確認された（出エジプト記19:5-6）契約の元来の担い手であった。タルムード（サンヘドリン94a）は、アッシリア征服（紀元前722年）後の十部族の散逸を語るが、ミドラシュ・タンヒュマ（キ・タボ3）は彼らの子孫が契約の遺産に結びついて存続すると示唆する。遺伝学的研究が実証的支持を提供：ネベルら（2001）やハマーら（2000）は、パレスチナ人が古代レバント人口（イスラエル人やカナン人を含む）とY染色体ハプログループ（J1、J2）を共有することを示す。ラキシのDNA（2019、**Science Advances**）などの考古学的証拠は、この連續性を確認し、パレスチナ人を何千年もの間この地域の住民と結びつける。

対照的に、ベンヤミン・ネタニヤフ、ヨアブ・ガラント、ベツアレル・スマトリッチなどの多くのイスラエル指導者は、東欧——ポーランドやウクライナ——に祖先をたどり、そこでアシュケナージ系ユダヤ人が欧州の混血とともにディアスポラから生まれた（コスタラ、2013）。彼らの数世紀にわたる地域不在は、パレスチナ人の継続的な存在と対比される。土地と結びついた契約（創世記17:8）は、留まった者——パレスチナ人——に最も真の継承者を見出し、彼らのスムードは追放の中での正義と忍耐の契約の呼びかけを体現する。

キリスト教とイスラム教への改宗：アブラハムの連続性

パレスチナ人のキリスト教（1～4世紀）およびイスラム教（7～13世紀）への改宗は、彼らの契約的地位を断ち切るものではなく、アブラハム伝統の進化を反映する。ユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、「多くの国民の父」（創世記17:4）アブラハムを通じて共通の系譜を共有する。初期のパレスチナ人キリスト教徒は、しばしばイエスをメシアとして受け入れたユダヤ人（使徒2:5-11）であり、契約の倫理的核心を守った：「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」（マタイ22:39、レビ記19:18を引用）。ガラテヤ3:29は、「もしもあなたがキリストに属するなら、あなたはアブラハムの裔であり、約束に従って相続人である」と宣言し、彼らの契約的役割を肯定する。同様に、クルアーンはイスラエルの子らの契約を語り（スーラ・アル・バカラ2:40-47）、正義と義を強調する（スーラ・アル・マイダ5:12）。アブラハムは「ユダヤ人でもキリスト教徒でもなく、ムスリム[神に服従する者]」（スーラ・アル・イムラン3:67）であり、イスラムを彼の一神教への回帰として枠づけ、パレスチナ人の信仰がこの遺産を続ける。

これらの改宗は断絶ではなく適応であり、正義、慈悲、生命の神聖さへの契約の要求を保持する（サンヘドリン37a）。元来の担い手の後裔であるパレスチナ人は、契約の使命に結びつき、彼らの宗教的進化はアブラハム信仰を越えたその普遍的呼びかけを反映する。

祖先の絆と継続的存在：契約の成就

パレスチナ人の祖先の絆と継続的存在は神の戒めと一致し、彼らの土地への神聖な権利を肯定する。創世記12:7は「あなたの裔にこの地を与える」と約束し、「永遠の所有」（創世記17:8）として再確認される。遺伝的・歴史的連続性を持つパレスチナ人はこの裔であり、彼らの居住は神の意志の成就である。彼らのスムード——1948年のナクバ（約70万人追放、UNRWA）や継続的な剥奪（西岸の約70万入植者、ピース・ナウ、2023年；ガザの約190万人追放、UN OCHA、2025年）を耐え抜く——は「諸国民の光となる」（イザヤ42:6）契約の使命を体現する。タルムード（ブラホット10a）は魂の贖いのための正義を求め、パレスチナ人は非暴力抵抗と自己決定の擁護を通じてこの原則を支持し、国際法（国連先住民族の権利宣言、2007年）によって肯定される。

クルアーンは「その地に住め」（スーラ・アル・イスラ17:104）と神の命令を記し、正義を保持する（スーラ・アン・ニサ4:135）。イスラエルの不法占領と入植に対するパレスチナ人の抵抗（国際司法裁判所、2024年、ジュネーブ第四条約49条引用）は彼らの契約的義務を反映し、彼らの存在は土地の神聖さを証する。

イスラムの管理対生態学的ナクバ：契約に結びついた守護者としてのパレスチナ人

契約の正義と神聖さへの呼びかけは創造の管理に及び、パレスチナ人は生物多様性を保つイスラムの原則を通じてこの義務を果たす。クルアーンは信者に「地上を腐敗させるな」（スーラ・アル・アラフ7:56）と命じ、庭園を維持する（スーラ・アル・バカラ2:266）。パレスチナ人の

オリーブ、キャロブ、柑橘類の栽培——8万～10万家族を支え、経済の14%を占める（ビジュアライジング・パレスチナ、2013年）——は土地の肥沃さと文化的記憶を育み、「耕し守る」（創世記2:15、スーラ・アル・マイダ5:12）契約の要求を満たす。彼らの段々畑農業と耐火性の在来種はスムードを体現し、イスラムの正しい管理の呼びかけに一致する。

対照的に、JNFによる2億5千万本以上の非在来松の植林は、80万本以上のオリーブの木を置き換え、531のパレスチナ村を覆い（パッペ、2006年）、生態学的ナクバを引き起こした。これらの松は土壤を酸性化し、生物多様性を害し（ローバー、2012年）、その可燃性樹脂はイスラエル史上最も壊滅的な山火事を引き起こし、2025年5月までに2万5千ドゥナム以上を焼き、カナダ公園を荒廃させ、エルサレムを脅かした（タイムズ・オブ・イスラエル、2025年；ハアレツ、2025年）。この冒涜はパレスチナの遺産を消し去り、神の不承認を示す（申命記28:63-64）。一方、パレスチナ人のオリーブの再植林は、契約に結びついた守護者としての彼らの役割を肯定する。

土地への権利と正義への呼びかけ

パレスチナ人の契約的地位——血統、連續性、イスラム的管理に根ざす——は彼らの故郷への神聖な権利を肯定する。申命記16:20は「正義、ただ正義のみを追い求めなさい」と命じ、伝統に響く：ユダヤ教のミカ6:8、キリスト教のマタイ5:9（「平和をつくる者は幸い」）、イスラムのスーラ・アン・ニサ4:135。彼らの持続可能な農業は生態学的ナクバと対比され、土地の正当な継承者としての役割を強化する。国際司法裁判所の2024年の不法入植に対する判決と国連の帰還権の承認（決議194、1948年）は、これらの神聖かつ法的義務と一致し、継続的な剥奪を非難する。

ガザでの暴力（約4万2千人の死者、ガザ保健省、2024年10月）や生態学的害を神の許可を主張して行う者は、チルル・ハシェム（エゼキエル36:20、ヨマ86a）を犯し、生命の神聖さ（ピクアハ・ネフェシュ、ミシュネ・トーラ、ヒルホット・ロツェアハ1:1）をcomの契約を冒涜する。黙示録（20:7-9）は、ガザの苦しみを「聖徒の陣営」への攻撃として象徴化し、神の不承認を強調するかもしれない。契約の継承者であるパレスチナ人は、正義と義への呼びかけを体現し、彼らのスムードは神の約束の成就である。

暴力と生態学的破壊を行う者への最後の警告：流血を止め、土地を回復し、正義を求める（イザヤ1:18）、悔い改め（ブラホット10a）、魂を贖いなさい。さもなければ、神の報復に直面する（申命記28:63-64、ピルケイ・アボット5:8）。パレスチナ人は、その血統、存在、管理を通じて、契約の永続的な遺産を尊ぶ。彼らの故郷への神聖な権利を——追放ではなく、共存と公平を通じて——認めるることは、アブラハム信仰を平和の共有追求で結びつける。